



第20回

WebとLinux、
テクノロジー・サポートの匠



技術理事、長野 紘は常に新しいテクノロジーに注目し、自らの仕事に積極的に取り込んできた。その活躍の場は、韓国・中国などを中心にアジア・パシフィックにまで広がっている。そんな長野 紘に入社から現在までの仕事、社員の育成法、そして目指していることなどを語ってもらった。

これまでの仕事について聞かせてください。

日本アイ・ピー・エムには1970年に入社しました。最初は営業所のSEです。そこで17年ほど自動車産業を担当しました。そのころは、IMSTMやデータベースなどをやっていた。途中で2年間ほど、海外にアサインメントと呼ばれたんです。1981年から1983年までですね。ちょうどコンピューターに漢字が使えないソフトウェアなんてだれも使わないと言われ始めていた時代です。そこでDB2[®]の中にも漢字サポートを入れなければならないということと呼ばれました。もちろん、私も、その当時はDB2のことなんて知りません。まだ、DB2が世の中に出ていない時代でしたから。なので、新しいデータベースということで驚きました。とはいえ、新しいデータベースの仕事、それも漢字サポートということで、それは結構、楽しかったですね。そして、1987年に現在のテクニカル・サポートに来ました。

入社以来、印象に残っている仕事は。

自動車会社というのは、先進的なことを多くやる機会があります。例えば、全国に数百台もの端末がありました。それをセンターからコントロールします。アプリケーションごと、端末ごとに、オンラインで指示を出します。IMSのマスター・ターミナルで、これをコントロールするわけですが、朝一番にこれをスタート/ストップするのです。しかし、台数も台数ですし、いろいろな組み合わせもありますよね。操作するのは人間ですので間違いも起きます。そこで、プログラムからIMSに指示を出すことができないかと思いました。お客様からもそういう声が上がっていました。そこで結局、作りましたよ。で、その成果をシ

リコンバレー(当時サンタテレサ)のIMS開発部門に伝えてみました。そうするとIMSの次のバージョンではそれが出てきました。今ではそれがIBMのファンクションの中に入っています。

また、先に言ったDB2の漢字化も印象に残っています。これがなかったら今のAP(アジア・パシフィック)におけるDB2のライセンスはゼロかもしれません。

現在、進めている仕事は。

今のミッションはテクニカル・プレセール・サポートです。お客様の案件を決めるときに、いろいろなテクニカルにデモやベンチマーク・テストをしますね。場合によってはお客様に来ていただき、実際に新しいテクノロジーやエマージング・テクノロジーを体験していただきます。

そのファシリティーが、e-TPデザイン・センター(IBM Design Center for e-Transaction Processing)です。米国ではニューヨークのポケプシー、フランスのモンペリエ、そして幕張と世界に3カ所あります。幕張は日本と韓国、台湾、中国などの、アジア・パシフィックをサポートしています。とても大きな案件ばかりです。世界で初めてのものもやっています。

新しい案件が発生したら、一生懸命に新しいテクノロジーの勉強をします。お客様のスキルもどんどん上がっていますからね。そして自信を持ってお客様を迎えるわけです。

われわれはサポートとマシンが無料です。お客様に、業務要件やリクワイアメントからデザイン・ワークショップを通じて、システム・デザインを実施します。さらに詳細を具現化したいお客様にはプログラムやシステムやデータを持ってきてもらい、実際にプロトタイプングしてもらいます。

お客様もトップから新しいテクノロジーを持ってこいと言われているので必死ですよ。徹夜もします。つまり双方が一生懸命なんです。最終的にお客様がPoC(Proof of Concept)を実現・体験して最初のミッションを持って帰られれば、お客様もわれわれもハッピーというわけです。

そこでメインにやっているのはWeb関係とLinuxです。いわゆる企業のメインとなるようなWebは、PCサーバーやワークステーションなどの小さなコンピュータではできません。信頼性も薄い。また、PCなどでやるとしたら何十台、何百台と並べてやらなければできません。そうすると、メンテナンス・コストや信頼性の問題、キャパシティの問題から結果として高くなるというわけです。

1990年代にクライアント/サーバーが流行しましたよね。結果、部単位でワークステーションやPCサーバーが増えてしまい、メンテナンス・コストなどがかかってしまいました。そこで、サーバーを統合して、もう一度、メインフレームに戻ろうというのが現在の波です。つまり、私たちがお客様にお勧めしているのはメインフレームでWebをやるということです。

また、最近ではどのお客様もLinuxに興味を持たれています。われわれは同じようにLinuxをメインフレームでやるということを中心にやっています。それに関しては幕張のLinuxチームだけでは人数が足りませんので、スワット・チームといって、IBMグローバル・サービスから人をアサインしてもらっています。また、マーケティング・ガイドも作りました。それは今、Webに載っています。2001年6月から始めて今がバージョン3です。12月までにアクセスが7,000件から8,000件になりました。最初は

100数ページでしたが、今では600ページです。それだけLinuxは変化しているんです。Linuxに関しては、とにかくテクニカル・パーソンの人口を増やしていきたいですね。WebとLinuxにおいてシェアのナンバーワンを目指して頑張りたいと思っています。

APの日本以外の国でも同じようにWeb化を目指しています。保険会社・銀行・カード会社など、どこもエンド・ユーザーが大きなところ。Design CenterでのPoCをベースに1台のコンピュータでWebをやっているトランザクションでは世界で指折りの大きなものが稼働しています。

技術理事としてIBMに貢献したいことは、ビジネスへの貢献は当然ですが、テクニカル・コミュニティの充実です。日本アイ・ビー・エムの中に、ワールドワイドのIBMアカデミー・オブ・テクノロジーのテクニカル・コミュニティがあります。その日本支部ともいえる、テクニカル・エキスパート・カウンセラー・ジャパン(TEC-J)というものを3年前に作りました。そこで日本アイ・ビー・エムの若い営業の人やIBMグローバル・サービス、大和事業所の開発部門の人などと一緒に勉強をしています。何かあれば提言もします。最初は数十人で始めましたが、今では200人に近いですね。

それに先ほども言いましたがLinuxにおいてもWebにおいてもわれわれが経験したノウハウを一つにまとめて登録しています。とにかく何かをする。それでビジネスに貢献する。われわれが成長する。若い人も成長する。そうやってほしいと思っています。

若い人に伝えたいことは、

若い人に向けて、改まって何かを言うというよりも、私のやっていることを伝えていきたいですね。

私は、若い人のやることを全部見た上で、いろいろなことをやって見せます。自分で端末も叩きます。もちろん自分にはないスキルは若い人からも学ぶ。彼らの吸収力は非常に早いですからね。仕事のやり方とかお客様への対応など、自分が持っているものは彼らに伝えていきます。とにかく横並びと一緒に働きます。

論文大会やワークショップにも積極的に参加させています。また、私はICP(IBM Certified Profession)のインタビュアーであります。申請書類を直前に書いた人はすぐに分かります。そこで、若い社員にはもっと手前から申請書類を読み、そしてそれをクリアするためのマイルストーンを出しなさいと言っています。私がインタビューしたAPの人は、最初ICP面接で不合格となったのですが、メンターとして、ビジョンの育成、講演やタスク・リーダーなどをすることを勧め、最終的には合格しましたよ。

とにかく、若い彼らにもっと会社全体を盛り上げていってほしいと思います。

長野 紘(ながの・ひろし)

日本アイ・ビー・エム株式会社
テクニカル・サポート
技術理事
IBMアカデミー会員

[プロフィール]

1970年日本IBM入社。営業所SEとして自動車会社を担当。1981年から1983年には海外アサインメントとしてDB2の漢字サポート開発に携わる。1987年、テクニカル・サポートへ。1997年、技術理事に就任。